

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]



▲(左から)「学窓座」1992年公演の様子／稽古場風景／合宿での一コマ

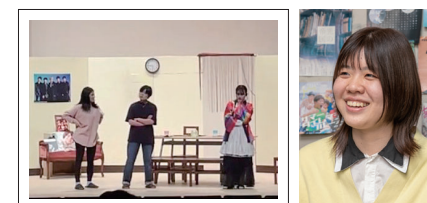
部の、4つの学生演劇団体があります。僕たちはその中でも現代劇、特に会話劇が多いことが特徴で、普段は3〜4カ月に1回のペースで公演をしています」と自己紹介してくれたのは、部長の西村さん。

2024年10月に大学側からのオファーがあり、今回の万博公演が決定した。普段の公演から役者として舞台上に立っている多賀さんは「入学した時から関大が万博を盛り上げていくという話は知っていましたが、まさか演劇部に声が掛かることがあるなんてとても驚きました」と万博公演が決まった時のことを話す。

今回演出や脚本を担当し、役者として舞台上にも立った荒川さんも「自分が熱意を持ってずっと続けてきたのが演劇。その演劇で万博の舞台に立てるだなんて、こんな貴重な機会をいただけてとてもうれしかった」と喜びを見せた。

●普段の公演とは異なる特殊舞台に四苦八苦

準備は短編4作のオリジナル脚本の執筆からスタートした。いつもと違うのは「宗教上の食事制約の共有」「抗菌・殺菌素材」「凍結技術」「IL電池」といった各企業の取り組みが題材であること。企業担当者からの詳細な説明を受けて、脚本担当座員がプロットを考案、方向性を企業側と確認しながら脚本を完成させたのも今までにはない経験だった。



▲中高時代(写真中央:荒川さん)

●荒川優花さん

今回、『きみとそらへかける』の脚本を担当した荒川さんは「物語はすぐに思い浮かんだものの、題材を脚本に落とし込む時に、最初は堅苦しい説明口調になってしまいました。でも観客に誤解なく伝わるようきちんと表現したいという思いもあり悩みました」。しかし企業の担当者から「皆さんの自由な発想でやってほしい」との言葉を掛けてもらい、責任感を持ちながらも思うままに取り組むことができた話す。

普段は学内のホールなどで公演を行っているが、万博のステージは屋外ということにも頭を悩ませた。通常使用している照明などは屋外では使用できない。また壁や屋根がなく外部からの音も聞こえる状況だったため、声の届き方や反響などの予想ができず不安だったという。

さらにステージを使えるのは本番当日のみという制限もあり、舞台設営についても普段の公演のような進行スケジュール通りにはできなかった。「いつもの公演は1週間ぐらいホールを借りて、最初の4日間で設営準備、2日間公演して、1日で片づけ、というスケジュール。でも今回は本番当日にすべて行う必要があったので、舞台装置に凝り過ぎると準備が難しくなるし、悩みどころでした」(西村さん)。普段の公演とは異なる制限も多い中、大学内で

万博のステージと同じような舞台サイズの場所を借りて、設営から撤収までを含めたリハーサルを行うなどの工夫もしたのだとか。そして学窓座では毎公演前にオーディションを行っているが、今回は特別に座員以外からの参加も受け入れた。新入生や他大学の参加者たちと共に舞台上に立つことは新しい風を感じる良い経験になったようだ。

●心躍る「100年後の未来」への夢を描く

不安や懸念材料を数多く抱えた中だったが、新しい題材でこの大舞台に立った高揚感とワクワクした気持ちは、座員全員に共通するものだったようだ。

「今の時代では非現実的に思えるものがあふれているであろう100年後の未来。そんな心躍る未来を自分の演技で伝えたい!」と思って舞台上に立ちました」(多賀さん)。「企業の方々から最先端技術や研究について説明を聞いた時、そんな題材を演劇で表現できることにワクワクしました。現実的なものも非現実的なものも同じ舞台上で表現できるのが芸術の良いところ。100年後の未来はきっと今では考えられないようなことがいっぱいある、胸が高鳴るような世界になってほしいなと思います」(西村さん)。

万博会場という、いつもとは何かも違う大舞台に立って期待に胸膨らむ「100年後の未来」を演劇で伝えた学窓座。今回の舞台でひと回りもふた回りも成長した彼らにとって、この先ずっと忘れることのない舞台となったに違いない。



▲中高時代(最前列右端:多賀さん)

●多賀水柚さん

心躍り胸高鳴る「100年後の未来」を描いて

——大学を飛び出し、万博会場の大舞台で公演

●文化会演劇研究部「学窓座」

システム理工学部3年次生
西村 和祥 さん (大阪府 追手門学院大手前高等学校)

社会学部2年次生
荒川 優花 さん (広島県 ノートルダム清心高等学校)

文学部2年次生
多賀 水柚 さん (福岡県 九州産業大学付属九州高等学校)

●企業開発の未来技術を題材にした万博の舞台

「万博をつくるのは、関大だ。」をキャッチフレーズに、関西大学では、大阪・関西万博の会場で数々のイベントを行っている。大阪ヘルスケアパビリオンでは、中小・スタートアップ企業の最先端技術などを発信する展示企画「リボンチャレンジ」が開催されており、8月には関西大学が実施主体として出展する。関西大学は、実施主体のうち唯一の教育機関として選定されており、「大学×企業が生み出すイノベーションの可能性」をテーマに、産学連携で「100年後の未来」を描き出す企画に期待も高まっている。

今回、8月の展示に先立ち、「100年後の未来」をテーマに出展企業が開発する技術によって創り出される世界を描いた演劇を披露したのが、文化会演劇研究部の「学窓座」だ。公演は6月8日、同パビリオン内のリボンステージで行われた。

学窓座は1946年創立、現存する関西の学生劇団の中でも屈指の歴史の長さを誇り、今春の新入生は81期だというから、その歴史の片鱗がうかがえる。現在は3年次生と2年次生がそれぞれ6人在籍しており、新入生の5人が仲間に加わった。

「関大には現在、『学園座』、『展覧劇場』、『万絵巻』、そして我が

2025年6月、大阪・関西万博のステージで公演を行った演劇研究部「学窓座」。リボンチャレンジ出展企業の最先端技術によって創り出される「100年後の未来」をテーマに、一から舞台を作り上げた。部長の西村さん、役者の多賀さん、そして脚本を書きながら役者として舞台上にも立った荒川さんに、万博公演への思いを聞いた。

